

223. 将棋史研究ノート(4)

—将棋の伝来と日本化の条件—

1. はじめに

平成5(1993)年4月に奈良県奈良市登大路町の興福寺旧境内から出土した15枚の将棋の駒は、その当時の新聞の1面を賑わした。将棋の駒とともに天喜6(1058)年の年号の見られる木簡が発見されたためである。それまで日本最古とされていた兵庫県の日高遺跡の年代を約40年遡らせたその駒は、玉将3枚・金将4枚・銀将1枚・桂馬1枚・歩兵5枚・不明1枚と香車を除いて平安将棋に必要な駒の種類が揃っている。さらに驚いたのは、それらの駒に混じて「酔像」の墨書の認められる習書木簡が見つかったことである。

1993年8月24日付け朝日新聞に載せられた将棋博物館主任学芸員 小泉信吾氏によると、長さ8.5cm、幅8cm、厚さ0.6cmの木簡を赤外線テレビで確認したところ、「歩兵」、「金将」、平仮名の「の」字とともに「酔像」と読める二文字が二箇所にはっきりと墨書されていたとのことである。「酔像」とは、中将棋の駒の一つである酔象であることは間違いない。

中将棋は鎌倉時代に成立したと考えられているもので、玉将の隣に並べられた酔象は敵陣にはいると太子に成り、玉将が取られても王の代わりとしてゲームは続行されたのである。その酔象の駒が1058年にすでに登場していたことは、平安時代にすでに中将棋が成立していたものなのか、それとも当時の「将棋」、「大将棋」以外の第三の種類が存在していたのか、謎を呼ぶ発見である。

2. 将棋の日本化の条件

さて、将棋の日本への伝来については遺跡からの出土遺物による1058年という年代が与えられているが、これは康平年間(1058～1064)に成立した藤原明衡の著とされる『新猿楽記』の年代とほぼ一致するものである。現在までのところ、最古の駒になっている11世紀中ごろの興福寺旧境内出土駒であるが、前記の朝日新聞によれば、小泉氏は約100年程遡った頃に将棋の伝来時期を考えられておられる。将棋が日本に伝えられてから、どのくらいの時間が経過し、どのような過程を経て将棋の日本化が行われたのであろうか。

私は、かつて将棋が日本に伝わったときの状況をあれこれと想像した事があった。中国から朝鮮半島を経由するにしろ、東南アジアから南西諸島を経由するにしろ、西日本の何処かの港にもたらされたものであろう事は間違いないと思っていた。そのときの駒の形は中国の円形や韓国で現在使われている八角形を参考にしながら、形象化されたもの、即ちチェスの駒のようなものを含めて可能性を考えていた。

将棋の伝来経路は、北方経路説(朝鮮半島から対馬經由＝陸路)と南方経路説(東南アジアから島伝いに南西諸島經由＝海路)とが考えられる。

増川宏一氏は海路を経て伝えられたほうが原型を保ちやすいことや、東南アジアの将棋と平安時代の古将棋に類似点が多いことから、まず東南アジアからのルートで日本に伝えられ、後に朝鮮半島から伝えられた将棋の影響を受けて変化したと考えておられる。

大内延介氏はタイ・マークルックの「象」の駒が銀と同じ働きをもつことや、8×8の将棋盤が升目を動く事、また歩に相当する「ピア」駒の位置が日本の将棋と同じ三段目に置かれることなどから東南アジアのタイ将棋との類似性を考えておられる。

木村義徳氏は中国の象棋と日本の将棋があまりに違うことから、かなり早い時期に分かれて別々に発展したとされながら、当時の交流関係の有無から朝鮮半島經由の可能性も捨て難いとされる。

小泉信吾氏は「中国及び朝鮮からの伝来を受けている囲碁・雙六などとは全く別のルートが考えられる」とするものの、「中国及び東南アジアルートのいずれかに求めるとしても、伝来の痕跡は今のところ全くない」と述べておられる。

ここで、日本の将棋と各国の将棋を比較してみることにする。まず日本将棋の特徴は以下の通りである。

- 駒が平面形をしている。(五角形を呈する)
- 駒に文字が書かれている。(縦に2文字)
- 敵陣三段目にはいれば成れる。
- 持ち駒の再使用が可能である。
- 駒は盤の升目(面)を進む。(9×9)

まずaであるが、平面形をしている駒は中国と韓国のみであり、中国は円形、韓国は八角形を呈する。他の国の駒は立像形をしている。中国は漢字を使う国であった為に立像形が文字に置き変わったものと考えら

れる。また、増川氏も述べておられるように、東南アジアの諸国は文字を知らない階層が多いということも立像形のままであったことと関連するであろう。

次にbについてはaと同じく中国と韓国のみであり、文字はどちらも駒の表面にのみ1文字書かれている。東南アジアの駒が敵と味方でそれぞれ色が違うのに対して、中国の駒は色の違いもさることながら文字の表記も異なっている。例えば、日本の王将に相当する駒は「将」と「帥」である。韓国ではその影響を受けて「漢」、「楚」となっている。

cについては各国さまざまであり、中国（象棋）は中央の河界を渡ること、タイ（マーク・ルック）は敵陣三段目に、インド（シャトランジ）やイギリス（チェス）は敵陣の一段目に達すること、そして韓国（将棋）は駒がなる制度はない。これらはいずれも「歩兵」に相当する最も弱い駒のみの権利である。それに対して日本では銀将以下4種類の駒にその権利が与えられている。

dは日本の将棋のみの特徴であり、日本以外は見られない。

eは大きく二つに分かれる。升目を進むのがタイ（8×8）・インド（8×8）・イギリス（8×8）・ビルマ（8×8）であり、中国（9×10）と韓国（9×10）は線上を進む。イギリスのチェスをも含めて駒が升目を進むのが一般的と言って良く、線上を駒が進む中国と韓国の将棋は少数派である。中国の将棋が線上を進むのは、伝来当時にすでに流行していた碁の影響があったとされる。

これらの特徴を見比べてみると、a・bについては中国・韓国と駒の形や文字が1文字であることが相違しているが、駒の種類を文字で現していることなどがよく似ている。駒の性格を文字で現している将棋は日本も含めて中国・韓国の三箇所だけである。日本の将棋の駒は表に2文字が書かれているが、山形県酒田市の城輪遺跡には表面に「兵」の1文字のみ記された12世紀後半の駒が出土している。この駒は「歩兵」の歩が省略されたとされているが、中国の「兵」と同じ文字であることから、日本へ伝えられた当初の形を残しているとも考えられる。cは歩に相当する駒が三段目に配置されるなどタイと一致している。これは敵陣の認識の違いと考えられる。例えば、中国の将棋では中央にある河界の向こうが敵陣であり、インドやイギリスの将棋は駒が二段目にあるにも関わらず一段目が敵陣と考えられているのであろう。タイの将棋が日本の将棋と似ていると言われる理由の一つは、二段目が空白になっており、平安将棋の形と同じだからである。eはタイ・インド・イギリス・ビルマなどが日本の将棋と升目の数が異なるものと同じである。増川氏は、

駒が升目を動くのか、線上を動くかの違いは、「たんに駒の進路の違いだけでなく、根本的な発想の差異がある」と考えておられる。

日本の将棋は、中国的な要素とタイ的な要素を混合して持ち合わせているようである。では、本当に増川氏の言われるように二時期に分かれて日本へ伝えられたものであろうか。以下、遺物として出土している将棋駒を検討してみる事にする。

3. 出土駒の概要

現在の時点で最古とされる奈良県の興福寺旧境内出土駒の年代1058年を基準にして、12世紀まで即ち平安時代の駒を対象にして考えていきたい。

図1に示してあるように平安時代の駒は全部で6遺跡22個が出土している。その内訳は、玉将3・王将1・金将4・銀将1・桂馬1・歩兵（「兵」も含む）10・不明2で香車を除いて全ての駒が揃っている。この6遺跡の性格を見てみると、宮殿・官衙跡3、寺院跡1、集落跡1、居館跡1となる。ここで、6遺跡の概略と出土駒の概要を述べておく。

〈興福寺旧境内出土駒〉奈良県奈良市登大路町にある興福寺は、法相宗の大本山で669年藤原鎌足によって創立された。藤原氏の氏寺として隆盛を誇り、強大な政治勢力として威をふるった。遺跡の年代は奈良時代から江戸時代に及ぶもので、井戸状遺構の底より「天喜六年」（1058）の墨書のある木簡とともに15枚の駒が出土している。「玉将」3枚（「王将」は確認されていない）、「金将」4枚、「銀将」1枚、「桂馬」1枚、「歩兵」5枚、不明1枚である。「玉将」の駒のうちの1枚は裏にも「玉将」と書かれている。また「金将」の裏には文字がなく、「銀将」の裏には「金口」、「歩兵」の裏にも「口」と書かれてあった。これらの他に「酔象」を初めとして「金将」、「歩兵」、平仮名の「の」が書かれた習書木簡が供伴している。

〈日高遺跡〉兵庫県城崎郡日高町に位置する平安時代初頭から鎌倉時代前半の遺跡で、但馬国府に推定されている。周辺には、国分僧寺・国分尼寺などが存在する古代但馬の中心地である。将棋の駒は、調査区中央の北に開いた沼状の凹地から出土している。凹地は上下2層に分かれ、上層の灰色シルトから「嘉保」（1094～96）と書かれた木簡とともに「歩兵」が1枚出土している。

〈酒田城輪遺跡〉山形県酒田市に所在する平安時代の官衙跡で、出羽国庁かと推定されている。水田遺構と見られる所の井戸より木簡や灰釉陶器・緑釉陶器とともに1枚出土している。表は「兵」、裏は「々」と墨書されている。

〈鳥羽離宮跡第77次〉京都府京都市伏見区竹田内畑町に位置する宮殿跡で、調査地は離宮東殿の推定地に

	遺跡名	所在地	遺跡の性格	年代	内容	数
1	興福寺旧境内	奈良県	寺院跡	天喜六(1058)年	玉将3・金将4・銀将1・ 桂馬1・歩兵5・不明1	15個
2	日高遺跡	兵庫県	官衙跡	平安後期(1094-96)	歩兵	1個
3	酒田城輪遺跡	山形県	官衙跡	平安後期	兵	1個
4	鳥羽離宮跡第77次	京都府	宮殿跡	平安後期	歩兵・不明	2個
5	柳の御所跡第28次	岩手県	居館跡	12C後半	歩兵	1個
6	上清滝遺跡	大阪府	集落跡	寿永三(1184)年	王将・歩兵	2個

平安時代出土の将棋駒一覧

あたる。将棋駒は平安代後期と考えられる幅約80cm、深さ15cmのSD2から輸入陶磁器や木簡・楽人を描いた板絵・塔婆・人形・木球などの豊富な木製品と共に2枚出土している。1枚は、表に「歩兵」、裏に「と」と墨書されている。もう1枚は、墨痕のみで判読できなかった。

〈柳の御所遺跡〉岩手県西磐井郡平泉町に位置する12世紀後半の居館跡である。この地は11世紀末から12世紀末までのほぼ100年間にわたって奥州一帯を支配し続けた平泉藤原氏の居館跡と伝えられており、「みちのくの小京郡」と呼ばれた政治・文化の中心地である。表は「歩兵」、裏は「と」と墨書されている。

〈上清滝遺跡〉四条畷市清滝に所在する平安時代末期から室町時代にかけての集落跡である。現在は、国道163号線に沿った小さな集落がある。この国道163号線は、江戸時代には清滝街道と呼ばれ、生駒山を越えて奈良と大阪を結ぶ街道の一つであった。遺構は掘立柱建物を始め、井戸、溝、落ち込み状遺構とともに旧河川が検出され、将棋駒は旧河川の斜面に投棄された状態で発見された「寿永三年」(1184)の記年銘のある木簡に伴って2枚出土している。1枚は表が「王将」と墨書され、裏は何も書かれていない。もう1枚は表に「歩兵」と墨書されているが裏は墨痕が見られるだけであった。

以上、遺跡と出土駒について概要を述べてきた訳であるが、将棋駒を出土した6遺跡の所在地を見ると、畿内3・山陰1・奥羽2に分けられる。畿内の3遺跡のうち、鳥羽離宮跡と興福寺旧境内は宮殿や大きな力を持った寺院などであり、当時の政治や文化の中心地である。また、山陰の日高遺跡は国府推定地であり、奥羽の酒田城輪遺跡は城輪柵の置かれていた所、同じく柳の御所遺跡は11世紀末より東北地方の政治・文化

の中心地として栄えていた所でもある。これらの中で、唯一上清滝遺跡の性格が一般集落であるという以外何も分かっていないが、詳しい内容は正式な報告を待ちたいと思う。

上清滝遺跡を除くと他の5遺跡は、宮殿・官衙・寺院・居館など、いずれも当時の知識階級と関連のある場所でしか出土していない。ここに居住している人々は、皇族を含めた貴族・役人・僧侶・上流の武士階級とそれに使役される人々である。使役民を除いた他の人々は、当然の事ながら漢字を読み書きでき、教養を身につけた知識人と考えられる。いわゆる識字層が集中して居住している遺跡がほとんどであるという事は、将棋を楽しむ場合の最低条件として駒に書かれた文字を読み、将棋のルールを理解する事と将棋を指すための時間を作り出せるという事が挙げられる。上記の5遺跡に関連する人々ならそれは可能であると考えられる。その意味からもこれらの遺跡から出土したのはいわば当然であろう。

4. おわりに

これらの情報より、今言える事がいくつかある。それは、日本最古の出土駒の年代から約150年(酒田城輪遺跡出土駒に限れば約100年)の間に、当時の日本の最北端といえる地点にまで将棋というものが広がっていったという事である。このことは興福寺旧境内出土の駒が、将棋というものが日本に伝えられてまだ日の浅い頃のものなのか、そうではなくて遥か昔に伝えられたものがより今日の将棋に近い形態を呈し始めた頃ののものなのかという問いかけになっている事である。この答は非常に難しいものがあるが、少なくとも将棋駒が今のような形になっていく過程を考えるならば、相応の時間の経過を見込んでおく必要があろう。

また、日高遺跡や酒田城輪遺跡など日本海側の遺跡

には、海路より伝えられたということも想像される。そういう意味で、酒田城輪遺跡出土の「兵」の駒は直接中国や古代朝鮮とのつながりを暗示しているように思えてならない。

今回は掲載していないが、鎌倉時代前期までの遺跡では兵庫県神戸市の玉津田中遺跡や神奈川県鎌倉市の今小路周辺遺跡など、さらに多くの地域から将棋駒の出土を見ている。つまり、鎌倉時代の前期には幕府を構成していた人々と共に鎌倉の地に将棋が伝えられたのである。これを見ても、将棋というものが庶民の間で遊ばれるようになるのはもう少し後になってからであろうと思われる。

このように、西は兵庫県から、東は山形・岩手県に及ぶ広い範囲で将棋の駒が出土しているのは、日本国内に伝えられてから相応の時間が経っているものと考えられる。しかし、日本での上陸地点候補として期待される西日本の諸地域からは、現在のところ将棋駒の発見は報告されていない。西日本の特に古代から栄えている港の周辺の調査が待たれる。ここから、将棋の伝来についての大きな手がかりが掴めるものと信じている。

(三宅 弘)

註

- ① 藤原明衡「新猿楽記」(『日本思想史体系』8 古代政治社会思想 岩波書店 1979)
- ② 三宅弘「203 将棋史研究ノート(1)」—将棋について思う事—(『滋賀文化財だより』No180 財団法人滋賀県文化財保護協会 1992)
三宅弘「203 将棋史研究ノート(2)」—将棋について思う事—(『滋賀文化財だより』No181 財団法人滋賀県文化財保護協会 1992)
- ③ 増川宏一(『将棋』ものと人間の文化史23 法政大学出版局 1977)
増川宏一(『盤上遊戯』ものと人間の文化史29法政大学出版局 1978)
- ④ 大内延介(『将棋の来た道』タイ編1・2 めこん 1986)
- ⑤ 木村義徳「持ち駒使用のはじまり」—将棋は十三世紀に成立—(『遊戯史研究』2 遊戯史学会 1990)
- ⑥ 小泉信吾「出土駒からみた将棋の発生」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987)
- ⑦ 註③に同じ。
- ⑧ 註③に同じ。
- ⑨ 水野和雄「将棋の流行」(『古代史復元』10 古代から中世へ 講談社 1990)
- ⑩ 註③に同じ。

- ⑪ 興副寺旧境内から「酔像」の駒が出土した事によって、鎌倉時代以降とされた中将棋の存在が早められる可能性がでてきたが、とりあえず従来の考えに従って中将棋が登場すると考えられる以前の初期段階として、平安時代までを考えている。
- ⑫ 清水康二・小栗明彦「興福寺旧境内」(『大和を掘る』1992年度発掘調査速報展13 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1993)
1993年4月27日付読売新聞「最古平安人の将棋駒出土」
- ⑬ 吉識雅仁・甲斐昭光「兵庫・但馬国府推定地」(『木簡研究』第九号 木簡学会 1987)
- ⑭ 小泉信吾「駒の出土例とその意義」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 一創立五周年記念—財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987)
- ⑮ 吉崎伸・鈴木廣司「IV鳥羽離宮跡」29 第77次調査(『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983)
- ⑯ 三浦謙一「岩手・柳の御所」(『木簡研究』第一三号 木簡学会 1991)
- ⑰ 野島稔「大阪・上清滝遺跡」(『木簡研究』第一二号 木簡学会 1990)
- ⑱ 識字層に拘るわけは、将棋の駒には表裏に字が書いてあることが挙げられる。確かに、字の読めない人でも将棋の駒に書かれてある文字なら他の駒の文字と判別する事は不可能ではない。しかし、駒を作るに際して書かれてある文字の意味が判らなければ、見本となったものと全く同じ様には書けない。また、少し後の例になるが鎌倉時代から室町時代にかけての芦田川口に広がる集落である広島県福山市の草戸千軒町遺跡からは、中世一般に広くみられる庶民の生活用具と共に、祭祀や信仰、遊びに関する遺物が豊富に出土している。しかし、将棋に関するものは全く認められず、当時、将棋が庶民の間にどれほど広まっていたかに関しては疑問を覚える。
- ⑲ 山本三郎・加古千恵子・中川涉「兵庫・玉津田中遺跡」(『木簡研究』第八号 木簡学会 1986)
小泉信吾「出土駒から見た将棋の発生」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987)及び註⑥に同じ。
- ⑳ ただし、将棋の駒が現在見られるような形態を呈しているものとの認識の上での話であり、他の形をして伝わっていたのであれば気付かない可能性が多分にある。